

夫婦間葛藤が青年期の子どもの適応問題に与える影響

——情動と認知に着目したモデルの検討から——

愛知教育大学大学院

発達教育科学専攻 教育心理学領域

後山鈴果

1. 問題と目的

子どもの適応問題の要因の中でも、夫婦関係のうち特に否定的な側面、夫婦間に何らかの心理的な対立が起こっている状態である夫婦間葛藤に着目した研究が進められている。夫婦間葛藤にさらされた子どもへの影響について、2つのモデルが提唱されている。夫婦間葛藤に直面した際の子どもの情動反応を媒介変数とする「情緒安定性仮説」(Davies & Cummings, 1994) と、夫婦間葛藤に対する子どもの認知・評価を媒介変数とする「認知状況的枠組み」(Grych & Fincham, 1993) である。本研究では上記を併用したモデルを作成し、夫婦間葛藤が情動反応と認知をどのように媒介して内在化型・外在化型問題それぞれへと影響を与えていくか、その過程を明らかにすることを目的とする。

2. 方法

大学生を対象に質問紙調査を行った。調査参加者は愛知教育大学の学部生 105 名、そのうち回答に不備のあった者を除いた 94 名(女性 66 名, 男性 28 名, 平均 20.85 歳) を分析対象とした。使用尺度について、夫婦間葛藤は Grych & Fincham, (1993) が作成した子ども評定による両親間葛藤尺度 (CPIC) の一部を、抑うつは抑うつ尺度 SRQ-D, 攻撃性は自記式反応の攻撃性尺度 (濱口・石川・三重野, 2009) を使用した。

3. 結果

夫婦間葛藤, 攻撃性について主因子法・Promax 回転による因子分析を行った。夫婦間葛藤について「夫婦間葛藤」「葛藤解決」「恐れ」「自己非難」の 4 因子が, 攻撃性について「報復意図」「怒り」の 2 因子が抽出された。

夫婦間葛藤が子どもの情動反応及び認知を媒介して子どもの内在化型問題や外在化型問題へと影響を及ぼすとした仮説モデルをもとにして, 報復意図, 怒り, 抑うつそれぞれを従属変数, 夫婦間葛藤, 葛藤解決, 恐れ, 自己非難を独立変数として重回帰分析を行った。怒りを従属変数とした場合に決定係数は $R^2 = .05$ と 5%水準で有意となった。標準偏回帰係数をみると, 恐れが正の有意な値 ($\beta = .22, p < .05$) を示している。

次に, 男女別に同様に重回帰分析を行った。女子については, 抑うつを従属変数とした場合に決定変数は $R^2 = .15$ と 1%水準で有意であった。標準偏回帰係数は恐れが正に有意 ($\beta = .38, p < .01$) となった。男子については, 抑うつを従属変数とした場合に決定変数は $R^2 = .15$ と 5%水準で有意であった。標準偏回帰係数は自己非難が正に有意となった ($\beta = .39, p < .05$) 。

夫婦間葛藤と葛藤解決, 夫婦間葛藤と恐れ, 夫婦間葛藤と自己非難についてそれぞれを得点の平均値以上を高群, 平均値未満を低群に分け, 各群を独立変数, 報復意図, 怒り,

抑うつそれぞれを従属変数として2要因の分散分析を行った。報復意図について、夫婦間葛藤と自己非難との間で交互作用が5%水準で有意であった ($F(1, 90) = 4.34, p < .05$)。怒りについては夫婦間葛藤と恐れそれぞれにおいて主効果の有意傾向がみられ ($F(1, 90) = 3.39, p < .10$; $F(1, 90) = 1.37, p < .05$)、夫婦間葛藤と自己非難では自己非難の主効果に有意傾向がみられた ($F(1, 90) = 3.19, p < .10$)。また抑うつについては恐れの主効果がみられた ($F(1, 90) = 11.25, p < .001$)。

4. 考察

重回帰分析を行った結果から、葛藤を抱える両親に対する子どもの不安や恐れといった情動反応が子どもの攻撃性を高めているということが考えられる。決定係数及び標準偏回帰係数においてともに有意な結果は得られたが、それぞれの係数の数値だけみると値はやや低いことが分かる。そのため情動反応と攻撃性との間に因果関係がある可能性はあるが、そのつながりは強くはないともいえ、より説明力の高い要因をみつけだし、検討していくことが必要である。

問題行動に対する男女差はみられなかったが、その説明変数となる恐れと自己非難、つまり情動反応と認知において男女差があったことは新たな知見であるといえる。川島 (2014) は、父親・母親の葛藤指標と子どもの自己非難との間に、女子では有意な差は得られなかったが、男子では有意な正の相関がみられたことを報告している。青年期の男子は夫婦間葛藤にさらされた際、女子に比べてより自分のせいであるという自己非難的思考に陥ってしまうのである。

また、夫婦間葛藤と自己非難を独立変数とした場合に報復意図において交互作用がみられたことから、夫婦間葛藤にさらされて自己非難的思考に陥った際に何かしらの思考や認知の変化あるいは何か別の変数が媒介となって、報復意図という外在化型問題を引き起こしてしまったのではないかと考えられる。

5. 引用文献

- 阿部達夫・筒井末春・難波経彦 (1971). Masked depression の Screening test としての質問票 (SRQ-D) について 精神身体医学, 12, 243-247.
- Davies, P. T. & Cummings, E. M. (1994). Marital conflict and child adjustment: An emotional security hypothesis. *Psychological Bulletin*, 116, 387-411.
- Grych, J.H., & Fincham, F.D. (1993). Children's appraisals of marital conflict: Initial investigations of the cognitive-contextual framework. *Child Development*, 64, 215-230.
- 濱口佳和・石川満佐育・三重野祥子 (2009). 中学生の能動的・反応的攻撃性と心理的不適応との関連——2種類の攻撃性と反社会的行動欲求および抑うつ傾向との関連——教育心理学研究, 57, 393-406.
- 川島亜希子 (2014). 夫婦げんかと子どものこころ 健康な家族とはなにか 新曜社.